ヤスクニ通信　No.244　2020 年 7 月 17 日
発行　靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い（略称「つどい」）　代表・西川重則
事務局　西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付　HP　https://yasukuninotsudoi.christian.jp/
例会　毎月第3金曜日　7:00～9:00pm（祝日の場合第 4 金曜日）
会場　たんぽぽ舎 TEL 03-3238-9035　FAX 03-3238-0797

ヤスクニ・レポ　244

「コロナ禍にあって、問われていると考えること」

須田毅（JECA 西堀キリスト福音教会牧師）

１．所属教会の状況

いまだコロナ禍にあって、諸状況の対応を一日ごとに変えなければならないのは、教会も例外ではない。その中で、当教会のコロナ禍における姿勢は、信仰共同体としてあり方を貫く余地が、まだあるのではないかと、今も繰り返し考えている。

感染防止のために、人の密集を避けるということが何より優先されて、会堂での主日礼拝を閉じて各家庭や各個人に委ねる、とした。牧師としては、それでも礼拝を共にすることを貫く兄姉が数人でもいれば、礼拝を継続して良いのではないかと考えていた。しかし、役員会および教会員の多数の意見が「他者への感染抑止の配慮によって、会堂での礼拝は中止にする」というものだったので、会堂での礼拝継続は早めにあきらめた。しかし共同体として礼拝を休止したという意識ではなく(詭弁と言われてしまいそうだなといくらかは考えつつ)、各家庭・各個人に主日礼拝を委ねてそこで主日礼拝は当然に継続されているという理解である。

信教の自由を教会として主張する場合、教会が神礼拝を継続する意思を明確にしている前提が必要である。しかし、その前提がなかったこと・弱かったことが、牧師としては落胆する点である。また、みことばを共に聞きながら「私たちは世俗に置かれているが、天の神を礼拝し、天の御国の集団なのだ」というような信仰的理解を作れなかった点は、牧師の力不足が如実に出た点である。私自身の教会形成の課題を明瞭にしていなかった弱さがあることを思い、また、その課題についての学びは形式的には折々にあったのだが、不十分だった。第二次大戦下のキリスト教会の反省点で、「第一戒を明瞭にしていなかった」ということが度々語られた。戦争状態と病気感染とでは、状況の比較は簡単にできない。しかし、常に信仰に生きる私たちにとって、「本当にあなたは信仰者か？　本当に信仰に生きているゆえの礼拝者か？　この状況は礼拝生活を大きく変えるべき条件となるのか？」と問われているように感じている。

２．地域的な証しということ

「教会でクラスターが発生したら、地域的な証しにならない」「ある教会では『教会では集会をしていません』と近隣にも分かるように告知し、三密をさけていることをアピールすべき」という意見もあった。同調圧力に従っているのか、教会内部からむしろそのような傾向が生じているのか、よくわからない。しかし、未信者の町内の方は、コロナの影響で主日礼拝がなくなったことを駐車場が日曜日に空いていることに気づいて私に声を掛け、「教会さんが、日曜日に集まらないの？」と驚かれた。その方は石川県出身であり、幼い頃は毎日家庭で読経させられたとのこと。また、当教会の置かれている新座市には平林寺という大きな歴史ある寺があり、季節的には修行僧が托鉢に近隣家庭を回ったりなど、信仰者が生きる日常性を自らの経験として知っている住民が多い。その方々から見ると、「キリスト教会の日常的な信仰生活はどうなっているのだ。日曜日の礼拝(仏教的生活を持つ人から見ると〈お勤め〉という感覚か)は、そんなに簡単にやめられるのか？」ということなのではないか。その地域性から考えると、教会内の意見は全く杞憂であることを思った。この近隣だったら、教会でクラスターが発生しても、「そうよね、教会さんは天国を信じてるからコロナで死ぬなんて怖くないでしょうね」くらいのことを言ってくれるのではないか、と想像する。

個人的には、クラスターを恐れずに、礼拝を継続するくらいの声が教会内から出ることを期待していた。不明な領域が多い病である故でもあるが、どんな病でも心配したらきりがないので、コロナ禍にあっても通常の礼拝生活を続ける意思が、もっとあっても良いのではないか、という物足りなさもあ

る。

地域的な証しと直接の関係はないが、かなり前(20 年くらい？)、福田康夫が官房長官だった時代に、彼の国会答弁に「有事の際には寺社や教会等の施設が、政府の目的のために使用される場合もある」という内容のものがあった。当時の牧師会等で話題になった。今回、教会内で話題になったのは、「教会堂を、感染者療養のために提供して欲しいと言われることがありうるのではないか」ということだった。実際には、感染状況はそこまででないだろうが、ある兄姉は「そうなったら、礼拝再開できない間でもあるだろうし、積極的に使ってもらったらよい」と言っていた。地域の役に立ちたい、という意見も常に話題になるので、その延長線にある意見と考えているが、あくまで、会堂が本来は神礼拝のために用いられるものであって、信仰共同体の生活のために備えられているということを第一に教会自身が確認して、その次に、もし必要ならばそのような緊急時に人を助けるために使うことも可能だとしなければならないだろう。

信仰的判断よりも倫理的善行実践(感染症の場合は医学的見地)が優先されやすいことは、私たちの教会の恒常的な課題である。教会の自律、教会は神の法／神の教えで治められていることを、共に意識していく必要を感じた。摂理の神が、この状況をも支配しておられる。場合によっては、どんなに人間的な感染を避ける努力をしても、御心の中で「病を得る」場合がある。牧師や信徒にコロナウイルス感染者が出たらば、即、地域での証しができなくなるわけではない。むしろ、信仰者は人間的偏見と闘わなければならないはずである。キリスト教会は、自らが好んで病になるのではなく、神によって病が与えられたと理解すしてきたので、「病を得る」と表現してきた。1995 年に、様々な教団教派で戦績告白を作成した。その中では、私の所属する団体もまた同様の文書を作成し、信仰的に間違った歩みをしたことを悔い改めることを述べた。しかし、この状況下で、信仰的な歩みをまちがえていないだろうか、と問われている。

２０２０年７月１７日例会奨励「彼らの行いは彼らについてゆく」

ヨハネの黙示録 14 章 13 節　星出卓也牧師　（日本長老教会西武柳沢キリスト教会）

先の 9-11 節において、獣の像を拝むものの結末を見てきました。彼らは、小羊の命の書に名が記されている主の民が苦境の中を歩んだのを横目に、安泰に生きてきた。しかしその結末は逆転し、彼らの安泰は「**昼も夜も休みを得ない**」という永遠の苦しみに変わるということを見てきました。同様に、この世にあって獣の像を拝まなかった主の民の苦しみもまた逆転を迎える、と語るのが 13 節です。

「**また私は、天からこう言っている声を聞いた。「書きしるせ。『今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである。』」**」

ここで「**主にあって死ぬ死者**」と書いているのは、先の 13：15 で「**また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。**」とある、主の御名の故に殺される多くのいのちをささげた証し人たちのことを想定しているからです。この世にあっては死しか報いられず、ただ苦難と忍耐の中を一心にイエスに目を注ぎ続けていった聖徒たちは、まさに「**主にあって死ぬ死者**」なのではないでしょうか。この世の報いを望まず、この世にあって主との交わりに生きた者こそが、主にあって死ぬ幸いを迎える。

天の声はこの幸いを書き記せと、描きます。この世の人々はこの幸いがわかりません。しかし天の声は、この幸いを書き記せと命じるのです。黙示録の巻物に記すと同時に、信仰者の心に、頭に、目にこの幸いを書き記し、この主にある希望をもって歩むように招いています。

天の声と同時に、御霊も同じように語ります。「**御霊も言われる。「しかり。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行ないは彼らについて行くからである。」**

ここで、主と共に生きる聖徒たちが、この世の労苦から解き放たれ休むことが出来る、とあるから、やがて来る世においては、毎日が休日なのか、と言いますと、そうではないようで「**彼らの行ないは彼らについて行く**」とあるように、ここで言う休みとは、仕事をしないでも良くなるということではなく、やはり同じ主のために仕えた奉仕は、永遠に残るものとして、新しい地に彼らについて行くのです。この世において神の御国に仕えた労苦は、やはり後の世においても受け継がれて行きます。しかしそれは沢山の敵に囲まれ、嘲られ妨害され、激しい忍耐と苦しみの中でこの世の流れと抵抗しながら行うような涙と嘆きが伴う労苦からは解放されますが、今度は心からの喜びと感謝にあふれて主の御国のための奉仕が後の世においては受け継がれて行く。それは地上の生涯の間、御国の希望を求めて主の御国を求めて労苦したことと、全く同じなのです。主はこの世で生きた通りを、後の世においても与えられるお方なのではないでしょうか。